Archive for 2 月 2023

セピア色のネパール(15): カトマンズ盆地の本屋さん

カトマンズ盆地には，新旧様々な文化・文明が混在していて，興味深かった。そうしたものの一つが，新たな情報・知識や教育への予想外の関心の高さ。

訪ネ前に読んだガイドブックでは，1980 年代頃のネパールの識字率は 20%程度であったので，ネパールには本屋さんや学校など，あまりないに違いないと思い込んでいた。（識字率の定義は広狭様々。1980 年代ネパールでは，おそらく「自分の名前の読み書き可能以上」であったのだろう。とすれば，実質的な読書可能人口は識字率よりも低いことになる。）

ところが，1985 年春，カトマンズに着き，街に出てみると，あちこちに新聞・雑誌・暦などを並べた露店やスタンドがあるばかりか，学校や官庁の近くには教科書や専門書を相当数揃えた本屋さんさえ，いくつか見られた。

もちろん，カトマンズ盆地は観光地であったので，旅行者向けの店が多いのは当然だが，そうした店であっても，絵ハガキやガイドブックだけでなく，多かれ少なかれカタそうな本や教科書も置いているところが少なくなかった。

置いているということは，それなりに売れるということ。正直，これにはいささか驚き，また感心もした。むろん，観光ガイドをパラパラ見ただけで来てしまったのだから，当然といえばそれまでのこと，ではあったのだが‥‥。

＊下記写真は 1990 年代以降のもの。撮影年は多少前後するかもしれません。

■現在のカトマンズの書店(Google 検索表示の一部, 2023/02/24)

■ニューロード沿いの新聞・雑誌露店(1990s)

■上掲露店で熱心に立ち読み(1990s)

■ダルバール広場の露店：レーニン，毛沢東，ヒトラー，プラチャンダ，ヨガ行者など固そうな本が並んでいる。(1990–2000s)

■トゥンディケル広場の露店で，政治・経済・哲学・歴史・宗教などの本を立ち読みする人びと。(1990–2000s)

■リキシャ車夫も新聞熟読。あちこちで同様の車上熟読が見られた。(1994)

■パドマカンヤ女子大前にあふれる教育訓練支援広告(1990s)

■TU 法学部(1990s)。近くに大書店あり。シンハダーバー官庁街までの道路沿い(約 300m)にも中小の専門書店が多数あった。

■専門学校では早くから男女共学

(1993)

谷川昌幸(c)

Written by Tanigawa 編集

2023/02/24 at 16:36

カテゴリー: ネパール, 情報, 教育, 文化, 旅行, 歴史

Tagged with 露店, 読書, 識字, 書店, 本

セピア色のネパール(14): バクタプルはトロリーバスで

バクタプルへは 1985 年，トロリーバスで行った。乗車は，たしかマイティガル付近。幸い車内には入れたが，例の如くオンボロ，ギュウギュウ詰め。降りたのは，バクタプル旧市街の小川の向かい側で，たぶんスルヤビナヤク。

トロリーバスを降りると，一面の菜の花畑の向こうに，バクタプルの小じんまりしたレンガ造りの街が一望できた。まるで，おとぎの国。

トロリーバスは，古都そのもののバクタプルはいうまでもなく，まだ古都の面影を色濃く残していたカトマンズにも，よく似合う乗り物であった。

が，残念なことに，中国援助で 1975 年に導入されたトロリーバスは，適切な維持管理が出来ず，2009 年に全廃されてしまった。

■カトマンズ盆地のトロリーバス 1985 年(Google,”nepal trolley bus,”2023/02/13)

■バクタプル行トロリーバス乗車（1985）

■バクタプル行トロリーバス車窓より（1985）

■バス停付近から望むバクタプル（1985）

もともとカトマンズ盆地は，それほど広くないうえに，歴史的に貴重な文化財や街並みが多く残されており，人びとの移動手段としてはトロリーバスや路面電車の方が適していた。

ところが，盆地の古都・京都が，地形も文化も考慮せず，市街に張り巡らされていた路面電車を全廃してしまったように（私鉄・京福電鉄だけが短区間とはいえ健気に孤高の孤塁を守っている），ネパールもトロリーバスを廃止，道路を新設・拡張し，車社会へと驀進することになった。その結果，盆地はバイクや車であふれかえり，排気ガスがよどむと，氷雪の霊峰ヒマラヤは霞み，街の散策にはマスクさえ必要になってきた。

このような車社会化のカトマンズや京都と対照的なのが，欧州の古都。多くが，路面電車やトロリーバスを，必要な改良・改革は大胆に取り入れつつも，なお運行し続けている。その結果，無機質な「近現代的」車道の拡張・新設は抑制できるので，欧州の古都の多くは今なお伝統的雰囲気を保ち，より文化的にして人間的である。（参照：欧州／ウィーン）

■ミラノの路面電車 1（2017）

■ミラノの路面電車 2（2017）

■トリノの路面電車（2017）

■トリノのトロリーバス（2017）

カトマンズ，京都などの古都が，街の非人間化をもたらすバイクや車を規制し，路面電車・トロリーバスなど，より人間的にして文化的な乗り物の導入へと向かうことを願っている。

【参照】(2023/02/25 追加)
「このままの形で維持していくことは非常に難しい…. そんな厳しい路線を JR から引き継ぎ、黒字化させた例がある。富山市の富山港線だ。地元主体でLRT化し、利用者数を1.5倍超にまで伸ばした。….改革を主導した森雅志・前富山市長に聞いた。」河合達郎「廃止に向かうローカル線を黒字転換」JBpress,2023.2.25
【参照 2】(2023/02/27 追加)
Sushila Budathoki, Why is the air in Bhaktapur so bad? Brick kilns, heavy highway traffic and prevailing winds make air quality the dirtiest in Kathmandu Valley, Nepali Times, February 24, 2023
【参照 3】(2023/03/07 追加) Trolleybus on the Kathmandu-Bhaktapur road

谷川昌幸(C)

読み込み中…

Written by Tanigawa 編集

2023/02/13 at 13:54

カテゴリー: ネパール, 社会, 経済, 文化, 旅行, 歴史

Tagged with トロリーバス, ローカル線, 道路, 都市交通, 路面電車, 車, JR, LRT, 富山港線, 排ガス

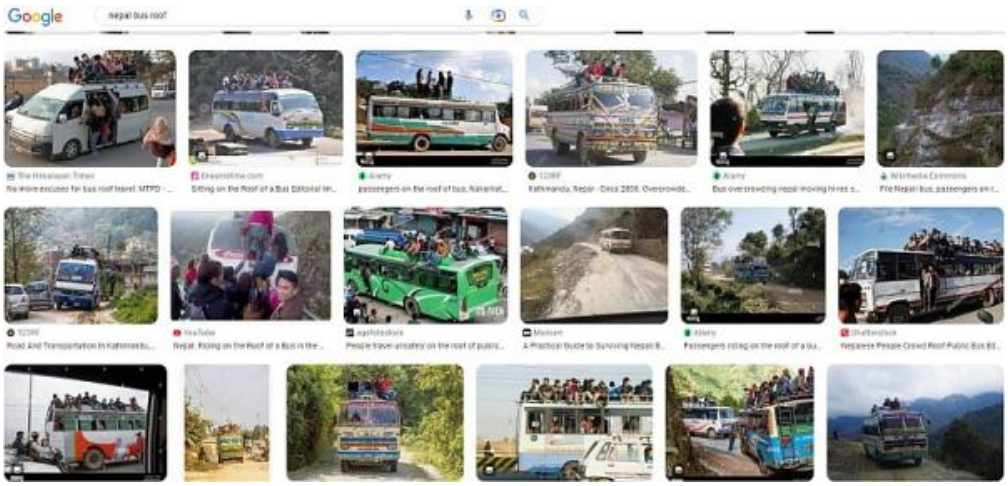
セピア色のネパール(13): しがみつき乗車の懐かしさ

ポカラなど，遠くへは乗合バスで行った。これはこれで，また忘れがたい強烈な体験であった。

1985 年春，ポカラ行き長距離バスは，スンダラのダルハラ塔横から，早朝に出ていた。チケットは前日にあらかじめ買い，当日は，かなり早めにバス乗場に行った。

ところが，乗場にはすでに多くの客が来ていて，バスが来ると一斉に駆け寄り，われ先にと乗り込み，あっという間に車内はギュウギュウ詰めの超満員となってしまった。あれあれ‥‥，と呆然となって眺めていると，あぶれた客が次々とバスの屋根に登り始めた。これを見て，私も「まぁ，仕方ない」と観念し，バスの屋根によじ登って，荷物止めパイプにしがみつき，ポカラに向かうことにした。

このような屋根に乗客を乗せたバスは，旅行ガイドで見て知っていたし，訪ネ後は実物を直に何台も見ていた。が，見るのと実際に乗るのとは大ちがい。走り出したとたん，いまにも振り落とされそうで恐ろしく，ふるえ上がってしまった。



■バス屋根乗車（Google”nepal bus roof”2023/02/09）

これでは，とてもポカラまで持ちそうにない，と途中下車も覚悟したが，タンコットあたりから客が次々と下車していき，峠に差し掛かる前には，どうにか車内に入ることが出来た。

やれやれこれで一安心とホッとしたが，それもつかの間，つづら折りの険しい山道から谷底が見え始めると，そこには何台か車が落下し，ひっくり返ったままになっていた。あぁ～，車内に入れても安心というわけにはいかないなぁ‥‥と，また心配になってきた。

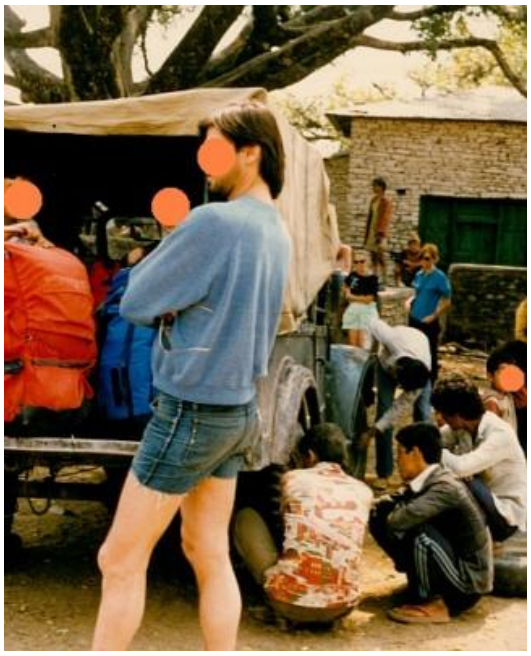
それでも，夕方前には何とか無事にポカラに着き，そこで一泊，翌朝，「ダンプス～ガンドルン」トレッキングに出かけることになった。

■ポカラ行バス：この屋根の上に乗った

(1985)

ポカラからダンプス登り口までは，乗合小型車の便が出ていた。早朝，ポカラの北外れの広場で待っていると，ジープがやってきた。すると，ここでも客が，どっとなだれ込み，すし詰め状態。が，このジープ，乗客の重さに耐えかねたのか，あっけなくパンク。仕方なく，エンジン故障修理したての別のジープに乗り換えたが，ここでも私は車内に入れず，今度は前ドア下のステップに足を置き，外から窓枠に手でしがみつき，出発することになった。

ダンプス登り口への道は川沿いのガタガタ，クネクネ悪路。谷底に振り落とされないよう必死でジープにしがみついていたが，橋のないところで川を横切るときは，ハネ水でびしょぬれになってしまった。こうして難行苦行，1時間ほどでダンプス登り口の小さな集落にたどり着いた。



■乗車直後パンクの1台目(1985)

■故障修理中の2台目(1985)

■ダンプス登り口。少女のような姿勢でこのジープに乗ってきた(1985)

このように，ネパールでの乗車体験は，四半世紀以上も前のことながら，いまでもよく覚えている。それだけ強烈な体験だったからだろう。

しかしながら，たしかに強烈ではあったが，全くの未体験というわけでもなかった。むしろ逆に，「あぁ，あれと同じようなことなんだなぁ」と，昔を懐かしく思い出しさえもした。

わが村近辺でも，1960 年頃までは未舗装クネクネ・ガタガタ悪路が多く，超満員の客を乗せたバスがヨタヨタ走っていることも珍しくはなかった。ときには，車内に入りきれず，入口ドアを開けたまま，ステップに乗り，手すりにしがみついている客もいた。

また大阪でも，バスや列車に客がわれ先にと，なだれ込むのが常態だった。整列乗車など夢のまた夢。1980 年ころ，イギリスに行き，どこでもバスや列車にきちんと整列乗車しているのを見て，「これが異文化なのだなぁ」と驚き，いたく感心したことを覚えている。

ネパールでの乗車口無秩序突進，屋根上乗車，車体しがみつき乗車——いずれも強烈な体験ではあったが，少なくとも私としては，西洋式整列乗車に覚えたような異質・異文化感はなく，むしろ逆に「あぁ，たしかにそんなことをしてきたなぁ」といった，懐かしさを覚えさせてくれるような体験であった。

【追補】（2023/02/12）

人間集団の行動様式は，文化であって不変のように思えるが，ときとして短期的に大きく変わることがあるのかもしれない。たとえば，ネパールの乗車マナー。

ネパール大震災（2015）の翌年，久しぶりにカトマンズに行き，バスで郊外と行き来して驚いた。乗車マナーが一変，老人，女性，身障者などの優先乗車・着席が行われており，日本よりもむしろ徹底していると思われるほどであった。

他の路線も同様か，また，その後も継続・徹底されているのかは，最近，訪ネしていないので分からない。もし乗車マナーが変化・定着しているのなら，文化的にも興味深い。

谷川昌幸(c)

Written by Tanigawa 編集

2023/02/10 at 15:59

カテゴリー: ネパール, 文化, 旅行

Tagged with ガンドルン, ジープ, ダンプス, バス, ポカラ, 行動様式, 屋根上, 乗車マナー